

一九二三年、森本厚吉は「文化生活運動」を現実化するために文化普及会を設立した。文化アパルトメント建築、女子文化高等学院設立などの実践活動とともにより生活学の色濃い機関誌として『文化生活』（のちに『経済生活』に改題）を創刊する。近代教育史・思想史のみならず、女性史・家政学・住居学研究に必須の文献として復刻！

文化生活

文化普及会 発行

森本厚吉 主宰

全七巻・別冊一

一九二三年五月〜三〇年三月

(一九二八年四月より『経済生活』に改題)

揃定価二五五、〇〇〇円十税



不二出版

◆復刻の辞

森本厚吉が、有島武郎・吉野作造とともに文化生活研究会を発足させたのは、一九二〇年五月、それから約一〇年間にわたって森本はアメリカ合衆国留学時代から構想していた文化生活運動を繰り広げた。「最大多数の最大幸福」を求めて贅沢を廃す一方、貧困からの脱出をはかり、同時に趣味も失わないという文化生活運動は、その啓発の対象を中流階級それもとくに若い女性にしぼった。生活の合理化・簡便化・快適化を求め、具体的には家事の合理化・家族の栄養向上・衛生管理・趣味と教養の啓発をはかった。一貫したプラグマティストである森本厚吉は、文化生活運動をより具体的に実践するために文化生活研究会と分かれ、一九二三年、文化普及会を設立する。そして文化アパートメントを建設（一九二五年）、一九二七年には教育機関としての女子文化高等学院も創立した。

今回復刻を見る『文化生活』は、森本の実践機関Ⅱ文化普及会の機関誌として創刊されたもので、文化生活研究会発行の機関誌名をそのまま踏襲した。

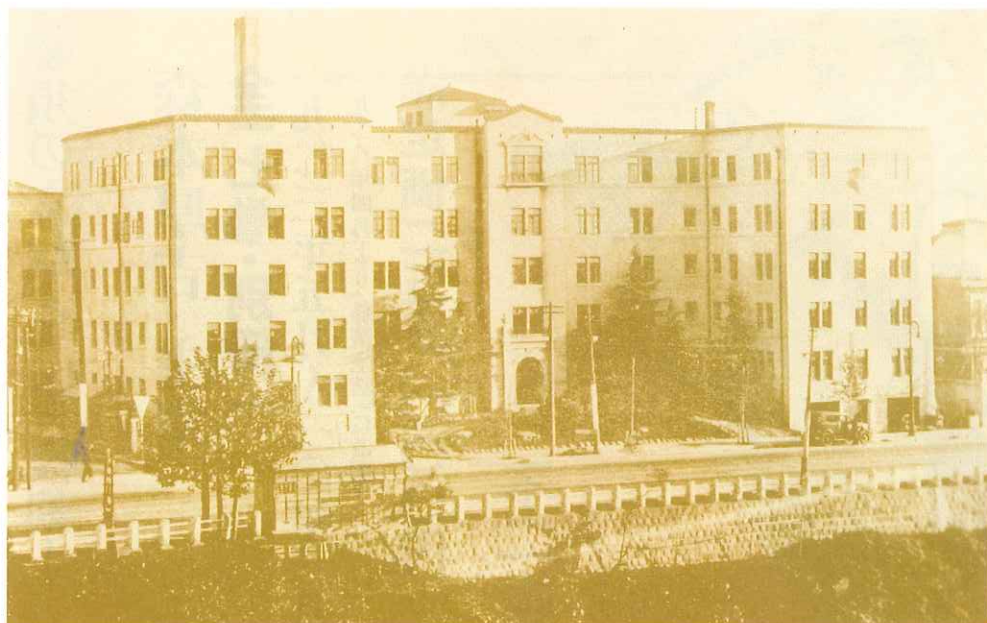
本誌は、文化生活運動という社会教育運動・生活改善運動を積極的に推進した森本厚吉と彼を支援する多くの文化人たちの思想とその実践のありさまをつぶさに知る好資料である。そのテーマは女性の経済的自立・産児調節など一九二〇年代に女性たちが向かい合った具体的な問題ばかりである。

執筆者には上代たの・石本静枝・今和次郎・田川大吉郎・帆足理一郎・小酒井光次・奥むめお・森本静子・平塚らいてう・谷本富など。当代一流の教育家・思想家の面々が実生活についての具体的な考えを大上段に構えずに述べていることも興味深い。

本誌の復刻は、大正デモクラシー期社会運動の一面を体現する重要資料であるばかりでなく、都市生活者である女性に向けた啓発雑誌として、日本近代思想史・女性史・家政学・住居学・生活科学などの研究に大きく寄与することが期待される。

なお、本誌は『文化生活』の雑誌名は継承したものの、巻号数は文化生活研究会発行の『文化生活の基礎』（小社にてすでに復刻済み）が継承したため新たに改巻した。

また本誌は、一九二八年には通号一〇〇号を機に『経済生活』と改題し、三〇年まで継続刊行されたことが確認されている。復刻にあたっては『経済生活』も収録した。



▶一九二七年、本郷区元町に建てられた文化アパートメント

戦後の家庭生活 民主主義化のルーツを見る

小川信子

最近、土浦亀城の「住宅計画」についてまとめる機会をもったが、その際、土浦と文化生活研究会の中心人物である吉野作造や文化普及会とはたいへん密接な関係があったことを初めて知ることになった。土浦の論文「住宅建築の標準化」の初出がこの文化普及会発行の『文化生活』第五巻第一号(一九二七年一月)であり、彼の住宅建築計画の原点は、一連の研究会活動の中にそのルーツを辿ることができたのである。

また、執筆者のひとり、佐藤功一は、家政学の中で特に生活と住居の關係の重要性を学生に伝え、早くから住生活教育に尽力した。そして、上代たの・今和次郎・吉田亨二など、第二次世界大戦後、大学において私が直接に女性の社会的自立とこれからの生き方について教養を受けた方々の名前が、本誌のなかに散見される。いわば、民主主義を家庭生活の現場から実現しようとしたこの時代の活動は、戦後の女子教育や、生活に対する考え方の指針になっていったと思われる。

『文化生活』を直接手にする機会に恵まれなかったので、復刻版が出ることによって各分野の研究者は日本近代の生活文化をより容易に学びうる事ができるだろう。また混沌とした現在、これからの方向を探る上で貴重な資料として甦るものと期待している。

(おがわのぶこ・日本女子大学教授)

「人格本位の経済生活」を 展開する一大フォーラム

佐藤全弘

この度復刻される『文化生活』全一七巻は、大正二二年五月から昭和五年三月までの八年間、物心両面にわたる特色ある言論活動をした機関誌の再現である。主筆の森本厚吉は、札幌農学校で新渡戸稲造の教養をうけ、札幌独立基督教会で入信したキリスト者、新渡戸の勧めでその母校ジョンズ・ホプキンス大学に留学、札幌で教えたあと東京で女子文化高等学校、ついで東京女子経済専門学校(今の東京文化学園)を創立、女性の自覚、生活合理化を通して社会文化生活の確立を目指した。ファシズムへ流れゆく時代にあつて、国家よりも個人の生活を重んじての社会改良を企てた。今回復刻のものの執筆者は計一二〇人、うち女性は二三人にのぼり、大正末から昭和初期にかけての文筆家を網羅した観がある。

『文化生活』は新渡戸のいう「人格本位の経済生活」を多方面から展開する一大フォーラムである。そこには哲学、宗教、教育はもとより、家庭、結婚、出産、住宅、衣服、食物、健康、さらには農村と都市、平和、貧困、参政権に至るまでが、個性豊かに論じられる。新渡戸と直接関わりのある執筆者だけでも、石井満、河井道子、安井てつ、上代たの、後藤新平、佐藤昌介、鶴見祐輔、那須皓、半沢洵、前田多門、矢内原忠雄などがみられる。

まさに、文化生活をめぐっての、彩り豊かな花咲き、緑色濃くかおる大森林に分け入る感を与えるもので、大正文化主義の時代と思潮を知る上で、これは欠かせぬ資料といえる。(さとうまさひろ・関西外国語大学教授)

◆関連図書のご案内(復刻版)

文化生活研究会 発行

有島武郎・吉野作造・森本厚吉 主宰

文化生活

全10巻・別冊1・付録1
別冊II解説(高原二郎・西川祐子)・総目次・索引
付録II「私」の主張
A5判(付録のみ四六判)・上製・総4、308頁
揃定価154,000円+税
95年6月12月配本完結

有島・吉野・森本が「文化生活」普及の目的で創設した文化生活研究会の機関誌として創刊された本誌は、男女平等を前提としての新しい生活様式の確立を若い女性に向け、具体的には家事の簡略化や合理化、家族の栄養向上や衛生管理、産児調節、趣味と教養の啓蒙を行なった。一九二三年にはより実践的活動を目指して森本が文化普及会を設立。誌名は文化普及会が引き継いだため、『文化生活の基礎』のちに「文化の基礎」に改題する。戦前期、市民意識の芽生えた時期、「軍事」と対峙する「文化」をキーワードに進められた文化運動の様相を明らかにし、社会教育史・女性史・文学史・生活史研究に必須の資料である。

●推薦II 石川松太郎・神辺靖光・中島邦・平井聖・松尾尊兌・安川定男



英訳に苦しむ「文化生活」

ヘンリー・スミス

ちよっと耳にただけでは当たり前に聞こえる「文化生活」ということばだが、その意味をもう少し探ろうとすると面倒なことになる。「文化」も「生活」も、一九二〇年代、雑誌『文化生活』が登場したころの日本では、それぞれ特別な意味合いをもっていた。しかしそのニュアンスを完全に英語に訳すことはできない。「文化」は、ただ単に「culture」ではなく、最新の西洋文化ということを示唆したし、「生活」もたんなる「daily life」ではなく、日常生活における能率や進歩性というようなニュアンスをもっていた。だから両者を「文化生活」と一つに結合すると形成期の日本近代中産階級のイデオロギーの出身を知ることができ。そのためには、『中央公論』や『改造』といった総合雑誌よりも、『文化生活』のような雑誌の方がより大正らしく、時代に近づこうとするには具合がよい。執筆には、吉野作造や安部磯雄といった大正リベラルの知識人、平塚らいてう・山川菊栄のような婦人運動の指導者たちがいた。と同時に、まったく知られていない著者による「おいしいサンドウイッチの調理方法」とか「避妊用ベッサリに就いて」とか「ネクタイと皮手袋の洗濯」といったような、中産階級のモダンな女性たちへの実際的なアドバイスにあふれていた。

今回の復刻を機会に、いまでは当然のことと思われている中産階級の価値観の、形成過程の研究はさらに発展するであろう。同時に、時代の様子がよく分かるこのように貴重な資料の復刻が、海外もふくめた広範囲の研究者たちにおおいに役立つであろうことに感謝したい。

(Henry Smith・コロンビア大学教授)

大正リベラリズムの キーワード「文化」

西川祐子

先の復刻版『文化生活』(文化生活研究会発行)の読者としては、文化普及会発行の『文化生活』の復刻を待って読みくらべてみたいものと、強く願ってきた。『文化生活』は、もともと男性の啓蒙家によってはじめられた運動の雑誌であったが、今回復刻の新たな周期には、アメリカ留学から帰ってくる森本静子、産児調節運動の石本静枝ほか女性の執筆者が増えている。そのことによってこの雑誌の家庭イデオロギーはどのように変化するのだろうか。新たに文化普及会の機関誌となった『文化生活』の第一巻第五号は、有島武郎追悼号である。森本厚吉の盟友であった有島の死は、大正リベラリズムの青空の遠く彼方に、やがて第二次世界大戦という暗雲のたちこめる予感のとき事件であった。じじつ、『文化生活』の目次には、関東大震災、アメリカ合衆国における排日法の成立、不況、さらには昭和の大恐慌など生活基盤をゆるがす社会構造の変化が刻まれてゆく。

大正リベラリズムを読み解くための重要なキーワードである「文化」は、次第に強大になる国家に奉仕するのが、それとも「生活」の名において抵抗するのが、たいへん興味深い。

(にしがわゆうこ・京都文教大学教授)



●吉野作造(一八七八―一九三三)

文化生活は所謂貧乏に及対します。……併し私共の文化生活は、人の人たる所以に相応しい生活として、其内容の無限に豊富ならん事を主張します

●森本厚吉(一八七七一―一九五〇)

正義と人道の上に、新文化を建設し、以て『最大多数者の最大幸福』を精神的及び物質的に、現実することが、実に刻下の急務である

●有島武郎(一八七八―一九三三)

個人がその自覚する最上の才能によって自由に生活し得る世界が即ち文化生活でなければなりません

婦人問題
早わかり

婦人と 婦人は

婦人が職業を求むるに至つたことは、現代の趨勢である。勿論、寧ろ婦人の職業問題といつても、中産階級婦人の概して頭脳を働かせる職業に従事するものと、労働階級婦人の主として筋肉を働かせる職業に従事するものとは、その意義内容に於いて著しく異なることはあるけれども、婦人が家を出て、職業に就くといふ一點に於いては、同一に見ることが出来る。

世には此職色々の評論を此種婦人、特定の労働階級に纏る様々の忌まはしい事件の起るにつれて此種婦人職業問題は愈々眞剣味を加へて来たのである。併し私共は直接此問題を云惟す前に、先づ此種婦人は何故に斯様に職業を求むるに至つたかに、一瞥を加へる必要ありと信するのである。

資本主義の勃興は、富裕階級に於ける富の集積と集中を意味するともに、中産階級以下に於ける生活難の増大を意味するものである。それを男子として考へれば、例へば富豪の子弟に生れ、學校を卒業したものは、就職難も生活難もあり得ない。



北むぎの座敷と庭

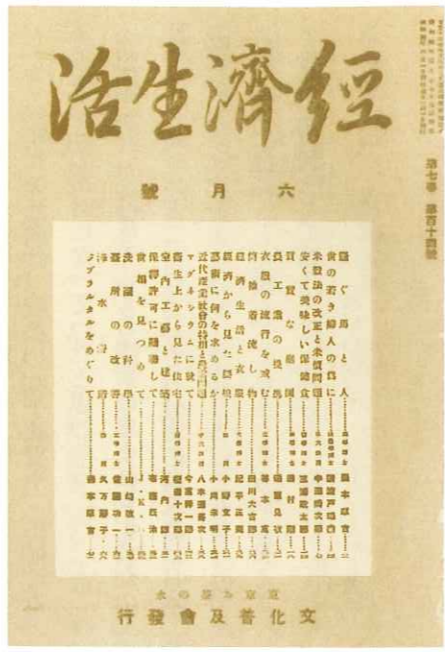
通俗家屋講話(其二)

佐藤 功一

北むぎの座敷
家屋の室の配置にあつて、居間と各個人の室とか云ふものをどうしても南むぎにさらなければならぬ關係上、座敷の如きは北にまはされる。此の部屋は使ふ時間の最も短かい所であるから北むぎであつても一かう差支へない。それに、これは贅澤な家の話であるが、南むぎの半線の澤山入る座敷では、掛物や額縁や動物の色合などがいたみやすい。此點に於ても客間の如きは北にざる方が却てよいやうに思はれる。

客間はかういふ點に於て一番贅澤な家具調度を施すものであるから、これは又更に贅澤な家の話であるが骨董品が飾られる、古く、色褪せ、角の取れたやうな骨董品は薄暗い部屋で見てよい味のあるもので、明るい場所で見れば感興の殺がる、この大いなるものである。たしかインケルマンであつたかローマンテズムの藝術品は月夜に物を眺むるかやうなものであると云つてゐる。かういふ意味で、時代と云ふかすみのかつた藝術品はやはりホノ明りで見ることが情調をます。客間が北むぎの方が面白いのも同じ理由である。殊に庇いつき出した客間は、層さう云ふ感がある。

◆ 内容見本



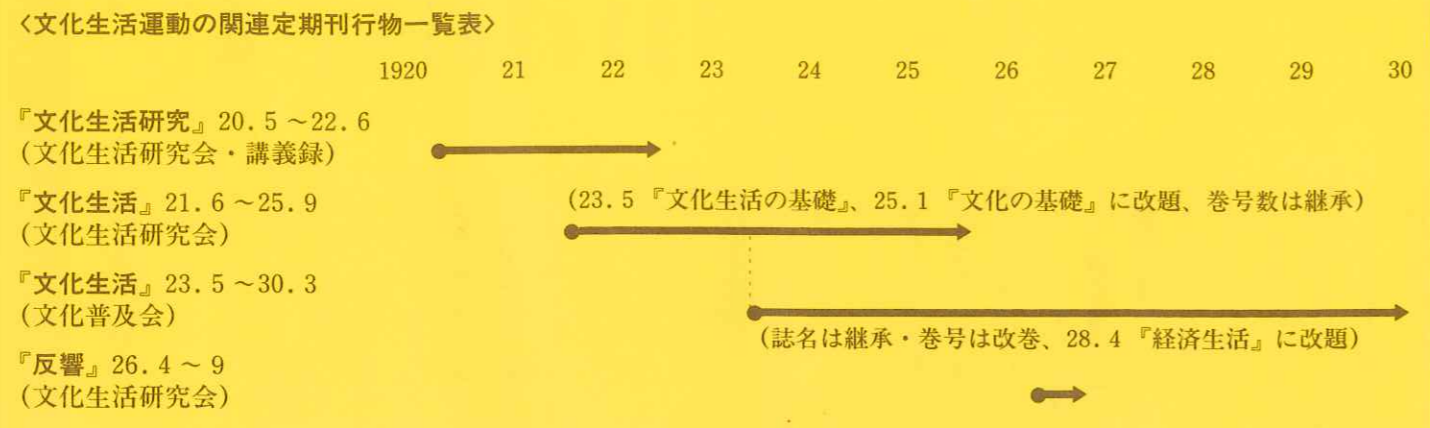
文化普及会 発行
文化生活 全17巻・別冊1
〔復刻版概要〕

〔体裁〕
A5判 上製クロス装綴七、八二二ページ
〔挿定価〕
二五万五〇〇〇円十税

〔推薦〕
小川信子 佐藤全弘 ヘンリー・スミス 西川祐子
〔別冊〕
解説Ⅱ 石川寛子(武蔵野女子大学短期大学教授・総目次・索引)
別冊のみ分売可Ⅱ(二〇〇〇円十税)
〔配本〕
全三回配本Ⅱ一九九七年六月〜九八年一月

● 復刻版巻数 ● 原本巻数 ● 配本年月 ● 定価
第1回〜第5巻(第1巻1号〜3巻8号) 一九九七年六月〜七万五〇〇〇円十税
第2回〜第6巻(第3巻9号〜5巻8号) 一〇月〜九万九千円十税
第3回〜第12〜17巻(第5巻9号〜8巻3号) 一九九八年一月〜九万九千円十税
※第六巻第四号より『経済生活』に改題

〈小社では、文化生活運動を總体的に捉えるために、その機関誌・講義録などの定期刊行物4点を復刻刊行する予定です〉
文化生活研究(文化生活研究会発行 1920年5月〜22年6月)全7巻(未刊)
文化生活(文化生活研究会発行 1921年6月〜25年9月)全10巻(既刊)
文化生活(文化普及会発行 1923年5月〜30年3月)全17巻(刊行中)
反響(文化生活研究会発行 1926年4月〜9月)全1巻(未刊)



不二出版
〒113 東京都文京区向丘1-2-12
電話 03(338)1244 333
ZAKENリ 03(338)1244 664
振替 00160-294084

● 本カタログ中の表示価格は全て消費税を含んでおりません。弊社は注文制です。お近くの書店にご注文ください。1997・4